

各関係機関長 殿
病虫害防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病虫害防除所長
(公印省略)

平成30年度農作物病虫害発生予察情報について

平成30年度農作物病虫害発生予報第15号を発表したので送付します。

平成30年度農作物病虫害発生予報第15号

平成31年3月18日
徳島県

I. 果樹

カンキツ

そうか病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月第3半旬の巡回調査では、旧葉での発生圃場率が20.0%、発病度が0.1と、平年(12.4%, 0.03)並の発生である。
- (2) 高松地方気象台が3月14日に発表した1か月予報では、気温は平年より高く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、平年と同様に晴れの日が多いと予想されており、発生抑制的な気象条件である。
- (3) 当センター農産園芸研究課果樹担当によると発芽期は平年よりもやや早いと予想されている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は病枝や病葉で越冬し、翌年の新梢発生時から6月頃まで新葉に雨滴によって伝染する。薬剤防除適期は4月上中旬の発芽直後(芽の長さ0.5~1cm程度)と5月中下旬の落花期である。
- (2) 春葉での感染が多いと果実の発病を抑えることは難しい。

かいよう病(スダチ)

1) 予報内容

発生量 平年より多く(前年より多い)、発生程度は「中」

2) 予報の根拠

- (1) 3月第3半旬のスダチでの巡回調査では、旧葉での発生圃場率が100%と、平年(86.3%)並の発生であるが、発病度は16.9と、平年(1.4)に比べて高い。
- (2) 高松地方気象台が3月14日に発表した1か月予報では、気温は平年より高く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、平年と同様に晴れの日が多いと予想されており、やや発生抑制的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 病原細菌は水滴によって運ばれ、気孔、傷口から組織内に侵入する。風速6~8m以上の強風を伴う場合、侵入が助長されるので、防風林や防風ネット等を設置し、防風対策を行う。

(2)前年の夏秋梢に発生した病斑が特に翌春の伝染源となるため、被害枝はせん定の際に、徹底して除去する。

(3)発病が認められる場合には、発芽前の3月下旬に薬剤を散布する。

ミカンハダニ

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年よりやや多い)、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

(1)3月第3半旬の巡回調査では、旧葉での発生圃場率が73.3%、寄生葉率が5.8%と、平年(60.5%、8.6%)並の発生である。

(2)高松地方気象台が3月14日に発表した1か月予報では、気温は平年より高く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、平年と同様に晴れの日が多いと予想されており、発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1)12月に薬剤防除を実施していない圃場では、3月中にマシン油乳剤を散布する。12月または3月に丁寧散布すれば、初夏まで抑制効果がある。

(2)マシン油乳剤とボルドー液は14日以上間隔をあけ、散布する。

果樹共通(特にモモ、ウメ)

果樹カメムシ類

1) 予報内容

発生時期 平年より早い

発生量 平年より多く(前年より多い)、発生程度は「中～多」

2) 予報の根拠

(1)3月の平均気温が平年より高い年は、予察灯における初誘殺日も平年より早い傾向があり(表1)、本年(2019年)の3月上～中旬における平均気温は平年値より1.7～1.8℃高かったことより、発生時期(越冬場所からの離脱)は平年より早いと推測される。

表1 3月の平均気温と果樹カメムシ類の予察灯への初誘殺日

年	3月平均気温 (°C)	平年差 (°C)	予察灯 初誘殺日	予察灯初誘殺平 年差(日) ^{*1}
2008	10.6	1	4月26日	7
2009	10.2	1	4月13日	-8
2010	9.9	0	4月20日	0
2011	8.3	-1	4月30日	11
2012	9.5	0	4月23日	3
2013	10.8	1	4月16日	-6
2014	10.1	1	4月26日	5
2015	9.9	0	4月5日	-18
2016	10.5	1	4月3日	-18
2017	9.2	0	4月23日	5
2018	10.9	1	4月3日	-16

*1 マイナス値=平年より早く誘殺

(2)2月に実施したチャバネアオカメムシの越冬調査(11地点×2か所調査)では、9地点で越冬を確認、越冬成虫は7.0頭/m²であり、平年(1.6頭/m²)に比べて高く、前年(成虫確認地点数は8地点、越冬成虫数は0.9頭/m²)に比べて高い越冬密度であった。

(3)高松地方気象台が3月14日に発表した1か月予報では、気温は平年より高く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、平年と同様に晴れの日が多いと予想されており、発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

- (1)果樹園周辺の雑木林から成虫が飛来するので、園内を巡回し、飛来を認めたら早急に防除を行う。
- (2)夜行性の虫なので、薬剤の散布は夕方か早朝に実施すると効果が高い。
- (3)移動性が大きいので、広域一斉防除により防除効果の向上に努める。

II. 野菜

冬春トマト

疫病

1)予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が20.0%、発病度が1.0と、平年(17.1%、1.4)並の発生である。

3)防除上注意すべき事項

- (1)気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続く等、十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2)窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので、肥培管理に注意する。
- (3)罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4)病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行う。特に、下葉には丁寧に散布する。

灰色かび病

1)予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並)、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)3月第3半旬の巡回調査では、葉での発生圃場率が40.0%、発病葉率が2.5%、果実での発生圃場率が11.1%、発病果率が0.1%と、何れも平年(葉:8.1%、0.4%、果実:1.3%、0.0%)に比べて高い。

3)防除上注意すべき事項

- (1)気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。
- (2)発病果や花卉などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (3)薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

葉かび病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)3月第3半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が1.3%、発病度が0.0)。

3)防除上注意すべき事項

- (1)気温が20～25℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。

- (2) 肥料切れは病勢の進展を助長するので、肥培管理に注意する。
- (3) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。
- (4) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行う。
- (5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が70.0%と、平年(42.1%)に比べてやや高いが、寄生葉率は2.7%と、平年(3.7%)並の発生である。なお、コナジラミ類の種類は、全てタバココナジラミであった。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ナス

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年よりやや多い), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が28.6%、発病果率が1.3%と、平年(10.1%, 0.2%)に比べてやや高い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (5) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が14.3%、発病葉率が0.4%と、平年(7.7%, 0.6%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少～中」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が71.4%と、平年(62.8%)並の発生であるが、発病葉率は5.9%と平年(11.4%)に比べてやや低い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が25℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤が下葉の葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が7.7%、寄生葉率が0.2%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アザミウマ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が14.3%、寄生葉率が0.1%と、平年(53.9%、7.6%)に比べて低い。また、被害果も認めていない。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2) 花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年よりやや多い)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が14.3%と、平年(15.8%)並の発生であるが、寄生葉率は5.9%と、平年(0.8%)に比べてやや高い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が12.2%, 寄生葉率が0.2%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春キュウリ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が66.7%と、平年(74.2%)並の発生であるが、発病葉率は2.9%と、平年(11.6%)に比べて低い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3) 同一系統薬剤の連用は耐性菌出現の恐れがあるので避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年よりやや少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が12.4%, 発病果率が0.8%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3) 発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (5) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

べと病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が44.4%と、平年(64.7%)並の発生であるが、発病葉率は4.9%と、平年(15.7%)に比べて低い。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2) 肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので、肥培管理に注意する。
- (3) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行う。

(4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

褐斑病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年より多い)で、発生程度は「中～多」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が66.7%、発病葉率が9.4%と、平年(73.3%, 13.0%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。

(2) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行う。

(3) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや多い)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が22.2%、寄生葉率が1.7%と、平年(6.7%, 0.1%)に比べてやや高い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アザミウマ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が33.3%と、平年(39.0%)並の発生であるが、寄生葉率は1.2%と、平年(5.5%)に比べてやや低い。また、被害果実は認めていない。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(2) 花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

(3) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

コナジラミ類

1) 予報内容

発生量 平年より少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が6.4%、寄生葉率が0.2%)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。コナジラミ類は葉裏に寄生するので、薬液は葉裏にも十分に付着するよう丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ハウレンソウ

べと病

1) 予報の内容

発生量 平年並～やや多く(前年よりやや多い), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月第3半旬の巡回調査では, 発生圃場率が20.0%と, 平年(9.4%)に比べてやや高いが, 発病度は0.2と, 平年(0.7)並の発生である。
- (2) 高松地方気象台が3月14日に発表した1か月予報では, 気温は平年より高く, 降水量及び日照時間はほぼ平年並で, 平年と同様に晴れの日が多いと予想されており, やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 県内では, ベと病菌レース13による発病が確認されているので, レース13以上に抵抗性を持つ品種を利用する。作型等の関係で作付けできない場合には, 薬剤による防除を徹底する。
- (2) 平均気温が8～18℃で曇雨天が続くと, 多発しやすい。発生が多くなると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤は予防的に, また下葉や葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
- (3) 葉が繁茂して軟弱となると被害が多いので, 肥培管理に注意する。
- (4) 病原菌は被害株についたまま越冬し, 春になると分生胞子を形成して伝染する。春先の発生を抑制するために, 薬剤を予防的に散布して発生を防止する。
- (5) 罹病株を圃場に放置すると, 次作の第一次伝染源となるので, 発病株は速やかに処分する。また, 春先に萎縮して奇形となった株はべと病に感染しているので, 速やかに処分する。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年より多い)で, 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月第3半旬の巡回調査では, 発生圃場率が70.0%, 1株当たり寄生虫数が0.04頭と, 平年(50.4%, 0.4頭)並の発生である。
- (2) 高松地方気象台が3月14日に発表した1か月予報では, 気温は平年より高く, 降水量及び日照時間はほぼ平年並で, 平年と同様に晴れの日が多いと予想されており, 発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので, 薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので, 同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春イチゴ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並), 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月第3半旬の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が3.6%, 発病葉率が0.2%, 発病果率が0.2%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので, 初期防除に努める。
- (2) 古葉を早めに除去し, 葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (3) 罹病した果実や茎葉などは早期に見つけ, 除去した後圃場外に持ち出し, 病原菌密度の低下に努める。

(4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が7.1%、発病果率が0.1%と、平年(8.6%, 0.4%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20℃位で多湿の時に発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。
- (2) 発病果は伝染源になるので、速やかに圃場から持ち出し処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が28.6%、寄生株率が2.0%と、平年(24.3%, 4.1%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年並)、発生程度は「中～多」

2) 予報の根拠

(1) 3月第3半旬の巡回調査では、発生圃場率が92.9%と、平年(65.0%)に比べてやや高いが、寄生葉率は18.0%と、平年(12.9%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも十分付着するよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性が発達する恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

Ⅲ. その他

- 1) 1か月気象予報では、気温は平年より高く、降水量及び日照時間はほぼ平年並で、平年と同様に晴れの日が多いと予想されており、施設内外の温湿度格差が大きくなると思われるため、施設内の換気には注意する。
- 2) 水稻の育苗や甘藷の圃場準備等が始まり、農薬を使用する機会が多くなる時期である。農薬による危被害、事故等を防ぐためにも、使用時には周辺環境に配慮した上で取り扱うとともに、使用残農薬、廃液等は適切に処分する。また、水田に薬剤を使用したときは、7日間以上止水する。
- 3) 薬剤の使用に当たっては必ず使用基準を遵守し、周辺作物等へ飛散しないよう注意する。

発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病虫害防除所

URL : <https://www.pref.tokushima.lg.jp/tafftsc/t-boujoso/>

○ 病虫害の発生予察情報, 発生状況, 防除法等をお知らせしています。